



姉崎 一馬

ハルニレをめぐって



姉崎一馬（あねざき かずま）

1948年東京に生る。

東京農業大学造園学科卒、現在フリーの写真家。著者に写真絵本「はるにれ」がある。主に理科や社会の事典、図鑑の仕事が多いが自然写真も撮り続けている。

子供時代、札幌の郊外で育った私が東京へ引っ越したのは、小学校二年が終わりかけた春だった。東京に着くと、札幌にはあれほどたくさん雪があったのに、木々には若葉が展開し始め、花さえ咲き出しているのである。たった八〇〇キロメートルほど南に来ただけで、これほど気候が違うということに感動したことを覚えている。当時、遊ぶことといえど昆虫を捜しまわることだった私にとって、この南国へ来たという思いは、夏になるとことさら強くなってきた。

東京の山の手になる世田谷区の昭和三十年代は、高度経済成長前の比較的身の回りに自然の残された良き時代であった。木造平屋の家並は庭の面積も広く、またマサキやネズミモチ、サンゴジュ、時にはカラタチなどの生け垣があり、そうした庭とも思えない部分でさえ、数々の生き物が生息していた。こうした生け垣にヤブカラシなどのツル植物が絡み、その葉をスズメガの幼虫が食べ、南国的な花にアオスジアゲハが黒地に半透明の水色の太いラインを振るわせて蜜を吸っている様は、北国では味わえない光景であった。

すでに都心では緑が少なくなり始めていた時代ではあったが、身近な環境に雑木林があり、池や川にもまだ沢山の生き物が見られた。二、三年はこの南国の自然もなかなかのものだと感じていたが、やはり、北海道の自然に較べるべきスケールというわけにはいかない。子供心にもなんとなく物足りない思いがあった。特に昭和三十五年以降の東京は、オリンピックを控えた空前の建設ブームで、身近な自然が、どんどん変わっていく時であった。少しずつ行動半径と視野が広がるにつれ、それは北の自然に対する望郷の念にも似た思いに変わっていった。



ハルニレの穴木

わが国は森林の国といわれているながら、他の国などより遥かに森林や樹木についての認識は低い。ほとんどの国民にとって、自然林と人工林の区別はコーヒーと紅茶を見分けるより難しいのではないだろうか。緑色の木が生えていれば山の自然は豊かだ、という程度の印象しか持っていないのが現実である。新聞や雑誌の記事ですら、緑の質をきちんと整理しないままに自然保護や林業の問題を取り上げているし、森林のシンポジウムでさえも、人工林と自然林の整理をしないままに討論が進行していることがあるくらいだ。こういう現状では、日本中の森が人工林に変わってしまったとしても、人々は気づかないだろう。

だが、身近かな自然が、ほとんど検討もされずに消されてゆくことに、大方の市民の抵抗がないということは、相当異常な事態である。こうしたことからは、少しでも親しみの持てる木や森の本を作りたいと考え始めたのは、環境問題に係わり出した学生時代の終わり頃だったように思う。

最初にとりかかったのが一本の大木を主人公にしたものだった。それは子供時代に過ごした北海道のイメージからくる、大草原と大きな木というテーマでもあった。早速たくさんの絵コンテを作り、まだ見ぬ木への旅が始まった。これは自分自身の回帰の旅でもあったが、同時に日本の自然を再確認することにもなったのである。東北と北海道をできるかぎり広範囲に捜しまわり、何本かの木との出会いがあった。しかし、撮影を進めるうちに周辺が開発されたり、切られたりで、当初の印象が一変してしまふものが多かった。三年が過ぎた春、偶然のことから十勝川河口の豊幌町で大きな木に出会えた。この木との出会いは、他の全ての木を忘れてしまうほど強烈であった。河川敷に広がる草原は荒れた牧草地で

あった。近づくにつれ、枝振りの端正さ、幹の太さ、全体から伝わる荘厳とも思える姿に眩暈がするほどであった。その木がハルニレであったのは、まさに運命の巡り合わせとも思えたのである。ハルニレというと、子供時代によく遊んだ北大構内の木々が記憶にあった。北海道に住んだことのある人間にとつて、この木は記憶の片隅に必ず存在しているといつてよいだろう。

そもそもユーカーにもあるように、ハルニレには女神が宿っているのである。この木の生える土地はよく肥え、豊かな実りが約束されている。湿潤な洪積平野を好むこの木の成育条件は、農耕に適する土地であるという。従つて開拓者がこの木を目指して入植してきたということもよく知られた史実である。北米の西部開拓史でも同じように、アメリカインディアンに教えられた開拓者がアメリカカニレを目標に西へ進んだといわれている。そうした点で、この木は豊かさの象徴といつていいだろう。

四、五年の撮影の後、写真による絵本形式にまとめた「はるにれ」は、いろいろな意味で好評だった。当初は大きな木を中心に周りの動植物の叙事詩といったものを書いてきたが、ぎりぎりまで切り詰め、ハルニレのみの四季と時間の流れだけでまとめることにしていった。文字のない木の写真のなかに、子供たちは自分自身の物語りを作り、大人は現実のロマンを感じたと聞く。なかには十勝ということだけを頼りに、この木の存在を確かめたくて十日も捜しまわったという人もいたのだそう。その話をまた新聞などが記事にするということが続き、多くの人が訪れるきっかけとなったようだ。

だが、だんだんと観光客が増え、道内観光のコースに組み入れられるほどになると、当然心配

されるのは、オーバーユースに伴う、周辺の牧草地の裸地化やゴミの問題である。そして最も不安があったのは、観光地化であった。国内のどの観光地にも共通する、土産もの屋や看板の類が所かまわず立ち並ぶ風景は最悪である。本州などの遠くから来る旅行者にとつて、北海道の魅力は広大さといつていいだろう。幸いなことに地元の豊頃町役場や商工会では、なにも施設を置かない、という意見が強く、控え目な案内程度に止めるといふ決議をしたという。これは現代の日本のように、何事にも新しく造つたり、建てたりすることのみが評価され、現状を守るといふことが消極的としてしか捉えられない社会では貴重なことである。だが草地のなかに出来た、ハルニレの根元まで続く一本のトレールは今後の難しい問題を象徴しているようである。

さて、このハルニレのように、草原に一本だけ、（正確には三本のハルニレが残されている）立つているという状態は、もちろん自然の状態ではない。十五年前、撮影を始めた頃はこの草地に多くの切り株があり、かつての大森林を思い起こさせた。ある時放映された、この木を紹介するテレビを偶然見た、最初の入植者から頂いた便りによれば、昭和三十二年か三年頃、請け負つてこの土地を切り開いたのだそう。そして伐採をしながらも、あの木だけは神々しく、切るのをためらつたのだという。わずかに三十年と少し以前、そこはハルニレを中心とした、鬱蒼たる森だつたのだらう。もし時間を戻すことが出来れば、その森を歩いてみたいものだ。おそらく、そこは原始の時を感じさせてくれる野生の世界であつたらう。しかし今、孤立した木が草地に立つ風景は、その大森林の時代から見れば墓標のようにも見える。三十年という時がこれほど自然を変えてしま

つた時代はないだろう。考えてみるとそれは、私が北海道を離れたころなのである。それだけに北海道の自然に対する思い入れは深いのである。

現在、多くの人々の努力の結果、森林や樹木へ目を向ける人が増え、緑の質についても少しずつ理解されるようになってきたようである。木や森をテーマとしたイベントなども開かれ、また、ほんの十年ほど前までは考えられなかつた森林の写真集なども数多く出版されるなど、森への関心は高まっている。特にブナなどに代表される落葉広葉樹林へ訪れる人の数は増える一方である。こうした傾向が一時のブームに終わらないようにしたいものである。こういう時代のなかで、今後このハルニレの周辺はどう変わつてゆくのだろうか。時折頂く読者の便りの行間から伝わってくるのは、あの、どこも存在のさだかでない草原にそびえるハルニレに、いつかは一人の旅人として出会いたい、というイメージである。そうした思いが幻影とならないことを願っているのである。

